

## 「ユニットテーマ」の考え方

吉田善章

「ユニットテーマ」とは、私たちが研究しようとする学問的テーマを指し示すキーワードのことであり、研究活動の「意味」を語るもの、ユニットを構築したとき、そのユニットの「旗印」となるものです。良いユニットテーマを生み出すために多くのエネルギーを使って知恵を絞っているわけですが、これはけっして「受け狙い」のキャッチフレーズで研究を飾り立てようという企図ではありません。そのような軽薄な目的ではなく、真に学問的な挑戦です。研究の「意味」を「言葉 logos」にすることは学問の最も本質的な仕事です。良いテーマは、それ自身が真理への道筋を示します。自らの言葉で自らの研究の意味を表現しようとしているのです。それは簡潔 (concise) であり、明解 (clear) であり、独特 (distinct) である必要があります。

幾つかの例を示して、皆さんの検討のヒントに供します。ここにあげるのは既存の成功例であり、私たちの目指すユニットテーマの「候補」ではありませんので、誤解のないように。

例1. 「動的平衡」 これは生命科学の分野でブレイクしたキーワードです。そう言われてみれば、プラズマでも、あるいは社会でも、色々なシステムの動作とは「そんなもの」のような気がします。つまり、分野を超えて共通の問題意識を喚起するテーマです。実際は、物理とか工学の分野からアイデアを輸入したと思われそうですが、生物のメカニズムにこの概念を導入してブレイクしたのは福岡伸一氏の卓見だったと言えます。

例2. 「データ同化」 これは天気予報を行うための気象シミュレーションの分野で言いだしたキーワードで、要するにシミュレーションモデルに含まれる多数のパラメータを観測データ使いながら修正して予測精度を上げようという方法です。シミュレーションを予測に使おうとしている人はだれでも同じようなことをしたいので、容易に共感を生むテーマですが、これがブレイクしたのは、ベイズ推定などの数学的な理論と結びついて「定式化」されたからです。問題意識の共有というレベルからイノベーションの協創という段階へ進むためには、定式化によってテーマを一般化することが必要です。「同化 assimilate」という権力関係を匂わせる用語には（「データ駆動」などにも共通する）データ＝経験への思い入れがあり、ルネッサンスにまで遡る観念論と経験主義の相克を想起させるところにセンスがあると言えます。

例3. 「自発的対称性の破れ」 南部陽一郎先生は、若かりし頃に物性理論の演習を受け持った経験がこの有名な理論を思いつく下地になったと言われています。色々なところに様々な姿で現れる事象には、しばしば共通の数学的構造がありますが、逆にそれらの事象は

アイデア＝数学的構造が色々な「物」を使って自らを実現（あるいは表現）していると考えられることもできます。個別的な事象を離れ、より深い層へ思考をめぐらせると、対称性という概念がテーマとなり、現象という事態そのものが対称性を破ることだというテーゼに至ります。この例も、現象の深層を対称性に係わる構造として定式化することで、分野を超えるテーマにしたわけです。

これら二つの例で「定式化」はまさしく数学にすることでしたが、定式化の意味はもっと広く考えてください。「明確に定義された概念にのみ基づいて論理的な推論が行われ、その筋道が客観化できる構造を与える」ということです。実験も同じことが要求されます。

例4。「旗印」とは、チームの活動に意味を与えるスローガンです。有名な「天下布武」（織田信長）や「厭離穢土 欣求浄土」（徳川家康）は戦（という蛮行）に（せめてもの）意味を与えることで、メンバーに結束を促すとともに、社会の支持を得ようとするものであったと思われまふ。これらの例は戦の目的を高らかに表明したのですが、もう一つ有名な「風林火山」（武田信玄）は軍の運用方法を語るものであって、そこに既に将たるもののスケールの違いが見て取れます。いささか脱線した例になりましたが、学問する私たちが掲げるユニットテーマは、チームを超えて広く学術界さらには社会へ向けたスローガンになります。遠くまで届く「翼ある言葉」を旗印に掲げる必要があります。

ユニットテーマの「言葉」を選ぶことは、決してレトリックの問題ではありません。研究の「本質」を言葉で表現すること、すなわち知の活動そのものの凝縮だということを、上記の例から読み取ってください。もちろん言葉遣い（wording）のセンスには文学的な素養も必要かもしれません。それはレビュアーのアドバイスも受けながら練り上げていけばよいので、まずは素朴でも良いから、簡潔・明解・独特な言葉を見出してください。